

てくてく農園

調査団体名	: てくてく農園	団体代表者名	: 横江克也
設立年	: 2011(平成23)年	対応してくれた人の名前	: 横江克也・横江晴菜
団体URL	: http://www.hm.aitai.ne.jp/~yokoe/		
活動拠点	: 豊田市榊野町池田26-4	調査員	: 蔵治光一郎・大島光利・森本徳恵
取材日	: 2014年12月13日	レポート作成者	: 蔵治光一郎

活動内容

農地を借り、野菜をつくる。鶏を飼い、卵を産んでもらう。不定期にジャムをつくる。これらを自家消費し、余剰を知り合いに「おすそわけ」する。おすそわけの方法は、決まったお客さんへの宅配のほか、インターネットでの購入申し込みも受け付けている。宅配は豊田市、瀬戸市内は自分で配達し、それ以外は宅配便で。名古屋や東京にもお客さんがいる。決まったお客さんは20~30人ほど。生産量としてはこれが限界。収入としては少し足りないが、生活はできている。

キャッチフレーズ

おすそわけを食卓へ

会のモットー(何を大切にしているか)

生産、販売をするのではなく、あくまで、自分たちの暮らしの余剰分を、自分たちの暮らしを応援してくれる人に「おすそわけ」する。市場に出して、知らない人に売るのはすごく気をつかうこと。店頭で並べるのは大変。規格品は作りたくないし、作ることができない。

設立から現在に至るまで変化したこと

基本は変わっていない。お客さんが20~30人になるまで、最初は口コミ、知り合いに分けていた。イベントに出展して宅配を募集し、お客さんが増えていった。野菜を先に始めたが、野菜は自分で作っている人も多い。卵は自分で作っている人は少なく、こだわりの卵を食べたいという人も多かったようで、増えていった。最近では、お客さんの顔が浮かぶようになり、こちらの思いだけでなく、お客さんのことを考えながら作るようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

農協、スーパー、市の販売所とは連携していない。行政からは青年就農の補助金、耕作放棄地を再生する補助金、電柵の補助金などをいただいた。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

自分たちの生活で精いっぱいだが、消防団に入ったので、同じ世代で外から入ってきた人たちや、地元の若者とは知り合いになった。地域のお祭りに参加し、太鼓を習い、門松を作るなど、もともと好きだったので苦にならず楽しめた。草刈をするとありがたがられた。結果として、ほとんどの日曜日に予定が入っている。

現在直面している課題

提供できる量を増やしたいが、一人でやれることには限りがある。卵は好評だが、3~5月が旬で、1日90個ほど産む。その時はおすそ分けできる人が増えるが、それ以外の季節では1日20個ほどになり、欲しいという人に分けてあげられない。鶏は現在約100羽。もう少し増やしたい。

今後やってみたいこと

研修生の受け入れ。自分たちのような暮らしをしたい人を受け入れたい。
ヤギを飼ってみたい。やってみたことがあるが、草の好き嫌いがあってきれいにはならなかった。
知り合いの農家さんとお互いに手伝い合いたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

研修生が1年限りで住める場所(ゲストハウスのようなもの)があるとよい。研修生に給料は払えないので、行政の事業で給料を払ってくれる制度があるといい。そのような制度はすでにあり、14万とか20万とかいった給料が払われるようだが、払い過ぎではないか、感覚がおかしくなってしまうのではないかと思う。

チームオリジナルの質問 1

<質問内容> 地域に、どういう受入体制があれば、外からの人が、もっと入りやすいと思いますか。

<答え> 四国の研修センターにいて、暮らす場所を探していたとき、豊田市に空き家バンク制度があったのがとてもよかった。売り家でなく、借りられること、行政が間に入って、採算度外視であること(不動産業者との違い)、1日に何軒も見回れたこと。豊田の中でも旭の物件が多かったので活発な地域だと思い、旭を選んだ。農業については自分で農地を探した。技術は研修で学んでいたの、行政や農協の仲介はない方がむしろよかったが、ゼロから始める人に対しては研修先、面倒を見てくれる人がいた方が入りやすいだろう。

チームオリジナルの質問 2

<質問内容> お子さんが生まれた後の生活は。

<答え> 「みんなで子育て」。地域のお役(草刈、神社の掃除、祭りの際の太鼓や笛、門松作り、お楽しみBBQなど)に参加すると、自然と地域の子供になる。抱っこする人が交代で面倒をみってくれる。子供が少し大きくなれば、一緒に太鼓の練習をしたり、門松を作ったり、料理を手伝ったり。また、近所で田植えなどあれば、子供も一緒に田植え(泥遊び?)を手伝ったり。地域内で母親と子供が孤立しない。緊急時には、子供の面倒を見てくれる人が近くにいることは、ものすごい安心。母乳、布おむつで乗り切るつもり。小児科の病院は、大きなところは足助にあるが、近くにないか探している。子供が小学生になったときに地域の小学校(敷島小)がまだあるかどうか心配。農作業のマンパワーは、子育ての分、減ってしまうことになるので、お手伝いの方がいてくれれば助かる。子供が生まれることをきっかけに、やり方を変えた方がいいかもしれないと考え中。

写真



ご自宅での取材の様子

てくてくたまごはこの箱に入れて提供されます。中には「てくてく卵のひみつ」として①国産飼料100%②平飼い飼育③抗生物質不使用についての説明が書かれています。さらに「豆知識」として、「黄身の色は食べているものの色」として、てくてく卵の鶏のごはんはお米が中心なので、黄身が薄い黄色(とうもろこしやパプリカなど赤や黄色の強いものを食べると黄身がオレンジ色になる)で、昔庭先で飼っていた頃の卵はこんな色だったかもしれません、と書かれています。

